

ブック

本書は、教育実践学として認知科学や脳科学の研究との融合の連携を図った内容であり、学校現場における教師の課題について、「子どもの学び」に焦点を当てて述べたものである。著者は「蓄積された科学の英知を、子どもの教育方法を伝えるために活用しなければ、恥ずべきことだ。教育が優秀な頭をつくる。頭について知ることが教育をより良いものに作る」と主張している。

全9章構成。各章とも「Question」・「Answer」・「Principle」形式で、章末には「教室への応用」として、授業で活用できる具体的な指導法や授業案等が提示されている。一例を挙げると、「詰め込み教育の単調な学習への批判VS子どもは練習により知識や技能を身につけてすぐに使えるようにしておく必要がある」との主張「を踏まえ



Daniel T. Willingham 著、
恒川正志 訳
2530円 東洋館出版社
☎03-3823-9206

教師の勝算

勉強嫌いを好きにする9の法則

て、「演習によって得られる認知的な成長は、子どものやる気を犠牲にするだけの価値があるのだから」か「Question」と投げかけ、「Principle」子どもの成長には演習 (drill) が重要な理由」を脳科学のワーキングメモリーの知見と、認知科学者によるテスト結果の分析から「記憶の分散効果」について説明している。そして、「教室への応用」として、知的技能の練習は、①思考過程が無意識に行われるようにし、さらなる学習を促進すること、②記憶が長期的に保持されるようにすること、

③学習が新しい状況に転移する可能性を高めること、

の利益を生むことを挙げている。さらに、子どもの負担を最小限に抑えながら、練習から利益を得られるアイディアとして、「何を練習すべきか」「練習の間隔を空ける」「練習をより高度な技能に組み込む」授業を行うことを提案している。

(愛知教育大学教授・高橋美由紀)